

研究課題名 遺伝子多型が消化器疾患術後経過および再発・予後に与える影響についての検討

研究責任者名 大学院医系科学研究科消化器移植外科学 教授 大段 秀樹

研究期間 平成 29 年 9 月（倫理委員会承認後）～ 令和 9（2027）年 3 月

対象者

平成 7 年 1 月 1 日～平成 26 年 4 月 13 日までに広島大学病院消化器移植外科で消化器疾患手術が行われた患者さんのうち、ヒトゲノム・遺伝子解析研究「内在性 unlicensed NK 細胞の肝癌再発・予後に対する影響（第ヒ-100 号）」において同意が得られ検体採取が行われた患者さんおよび、平成 26 年 4 月 14 日～承認日（平成 29 年 12 月 11 日）までに、広島大学病院消化器移植外科で消化器疾患手術が行われた患者さんのうち、疫学研究「消化器癌研究のためのデータベース登録（疫-922）」において同意が得られ検体採取が行われた患者さんおよび健常人ボランティアを対象にします。

意義・目的

肝胆膵外科手術は侵襲が大きく、さらに腫瘍の悪性度も非常に高いことが知られています。手術の侵襲度や腫瘍の悪性度と抗がん剤の効果や再発および術後合併症の発生率といった治療結果との関連については、これまで多くの研究が行われておりますが、患者さんの遺伝子多型と治療効果・結果との関連については、まだよくわかっていません。また近年消化器がんにおいて分子標的薬剤の導入が進んでおり、免疫担当細胞に関する遺伝子多型との関連が報告されていますが、エビデンスはありません。

今回我々は、患者さんひとりひとりの遺伝子の違いが免疫能、薬剤効果および手術成績や予後などどのような影響を与えるか検討することを目的とし、この研究を計画しました。

方法

本研究は、ヒトゲノム・遺伝子解析研究「内在性 unlicensed NK 細胞の肝癌再発・予後に対する影響（第ヒ-100 号）」および疫学研究「消化器癌研究のためのデータベース登録（疫-922）」において同意が得られて検体採取が行われた患者さんの血液および臓器から DNA を抽出し、免疫関連遺伝子や凝固関連遺伝子の一塩基多型があるかどうかを検査します。また診療録から年齢、血液検査、切除術式、病理所見、成績（術中出血量、手術時間、術後合併症、術後在院日数、在院死、30 日・60 日・90 日死亡、再発、予後）などのデータを抽出し、各遺伝子の一塩基多型の有無が各データと相関性をもつかを解析します。

共同研究機関 なし

試料・情報の管理責任者

大学院医系科学研究科消化器移植外科学 教授 大段 秀樹

個人情報保護について

本研究は広島大学ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会で審査を受けて承認をされています。研究は、プライバシー保護に十分留意して行います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。

研究に資料を提供したくない場合は以下の窓口へお申し出ください。お申し出いただいても今後の診療等に不利益が生ずることはありません。

問合せ窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3 広島大学病院消化器移植外科 准教授 小林 剛

T e l : 082-257-5222 E-mail: tsukoba@hiroshima-u.ac.jp